

遊漁船による瀬の海漁場の利用実態について

小林 良 則

Examination of fishing operation and catch
by game fishing in Senoumi

Yoshinori KOBAYASHI*

はしがき

大磯沖から二宮沖に広がる大磯海脚、通称「瀬の海」は、古くから相模湾内有数の好漁場として沿岸漁業者に利用されてきた。

神奈川県(1990)によれば、瀬の海漁場の歴史の概要は次のとおりである。

「瀬の海が漁場として本格的に利用され始めたのは明治時代からで、ウズワ、アジ、サバなどの回遊魚を対象とする釣り漁場として、近くの漁船が活発に利用し始めた。その後、大正末期から昭和初期にかけては、東は三崎から西は下田方面までの漁船が集まり一つの盛期を形成した。戦後の食料難時代にはイワシの来遊が多く、これを追ってマグロ、カツオ等も来遊し、漁場の利用は最高であったといわれている。この頃、まき網漁業も含めて過度の漁場利用があったといわれており、昭和30年代になると魚群も、漁獲も少なくなった。この対策として、全国に先駆けた大規模な漁場造成事業として、昭和32~37年にかけて人工魚礁が投入され、漁場利用は一時的に活気を取り戻した。

しかし、昭和40年代に入り、瀬の海での漁獲が大幅に減少し、漁業の対象としての漁場価値を失い、漁業から転向した遊漁案内業の対象漁場にとって変わった。」

聞き取り調査によれば、現在、漁業では、大磯及び小田原地区の10ヶ統ほどが樽流し(アジ、サバ、ムツ、オオメハタ)、延縄(アマダイ)、一本釣り(スルメイカ、ヤリイカ)で操業している程度である。

また、遊漁では、「遊漁船業の適正化に関する法律」(平成元年10月1日施行)に基づく届出結果(平成2年12月末現在)によると、横須賀市長井から小田原市江之

浦地区の遊漁船業者のうち106経営体、約170隻が利用している。

このように、瀬の海が遊漁対象の漁場にとって変わり、現在に至るまで20余年の歳月を経ているが、近年、関係漁業者及び遊漁者間で、資源の減少や漁場環境の悪化などが懸念され始め、今後の漁場利用のあり方等、その対策を求める声が高まっている。

そこで、瀬の海漁場の利用方策に資するため、標本船調査を実施し、当漁場の利用実態を周辺海域と対比しながら把握する目的で解析を行った。その結果、利用が同海域へ特異に集中している実態を数値で明らかにしたので報告する。

報告に先だち、本調査に多大な御協力をいただいた標本漁家の方々、当場相模湾支所柴田勇夫氏、指導普及部岡部勝氏、前川千尋氏及び資料のデータベース化、集計プログラムの作成に御尽力いただいた指導普及部杉浦暁裕氏に厚く御礼申し上げます。

方 法

調査対象海域(以下対象海域と略す)を図1に示す範囲とし、これを緯度、経度2分間隔に区分し、A及びBの漁区を瀬の海漁場とした。表1に示すように、葉山町から小田原市の範囲から瀬の海漁場を利用する標本船22隻を選定し、図1に示す調査票の記帳を依頼した。記帳結果から、出漁日ごとの漁区別、漁法別、操業・漁獲状況を基本データとし、利用隻(日)数、利用人数、餌の使用量及び魚種別漁獲量等を求めた。

調査期間は1990年7月から1991年6月までの1年間である。

漁獲状況調査票

月 日 (船宿 出漁 隻 人、瀬の海利用 隻 人)

目的魚	漁法	人数 名	
漁場名 まわりの隻数	水深 尋・m	餌の種類： イカ・サバ イワシ・アミ・その他	餌の使用量 kg
漁獲した魚の種名と量 (出来るだけくわしく書いて下さい)			
魚種名・大きさ	尾 数 (尾)	重 量 (kg)	標識魚の有無
例、マサバ 〇~〇cm	〇~〇尾/人、平均〇尾/人	kg	(標識のり付)

魚の大きさは、全長で記入して下さい。

出漁した漁場に○印をつけて下さい。(小さなます目に)

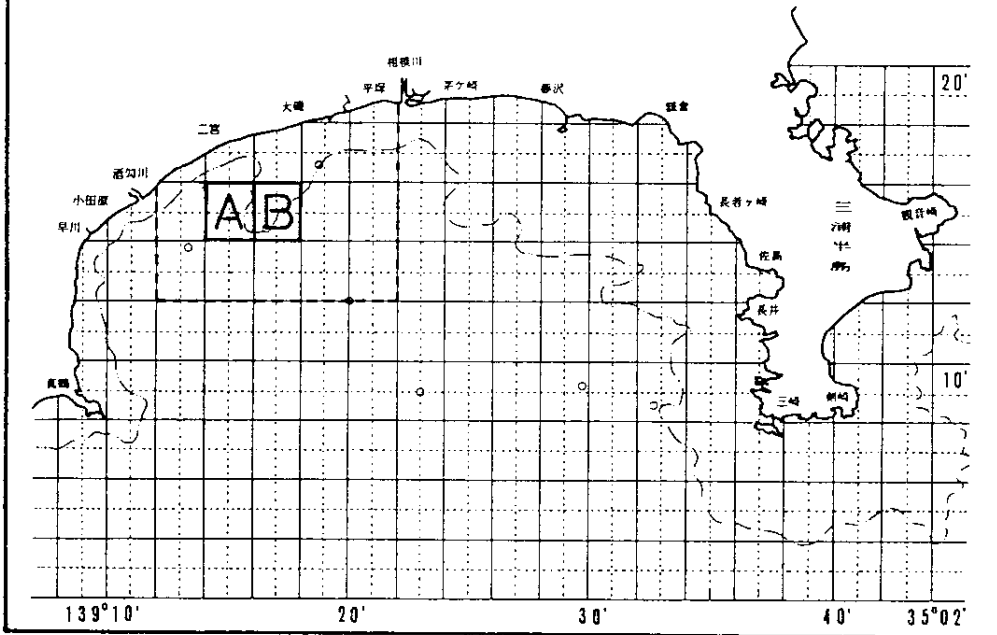


図1 漁獲状況調査票

表1 標本船の地区別内訳

地区	経営体	隻数	備考
葉山	1	3	遊漁専業
江ノ島片瀬	1	1	"
茅ヶ崎	2	2	"
平塚	3	3	"
大磯	9	9	遊漁専業 4 漁業専業 1 漁業主体 2 兼業 2
小田原	4	4	遊漁専業
計	20	22	

結 果

1 出漁状況

(1) 漁法別出漁日数, 利用率

標本船22隻による1年間の漁法別出漁日数を対象海域全体と瀬の海漁場分に分けて表2に示す。調査海域全体における標本船の年間出漁日数は4,980日で、漁法別内訳は、釣り3,871日(77.7%),いかつり481日(9.6%),延縄500日(10.0%),刺網28日(2.6%)であった。このうち瀬の海漁場への出漁日数は1,847日で、漁法別内訳は、釣り1,743日(94.4%),いかつり18日(1.0%),延縄70日(3.8%),刺網16日(0.9%)であった。

したがって、瀬の海漁場の利用率は、全漁法で37.1%、漁法別では、釣り45.0%、いかつり3.7%、延縄14.0%、刺網12.5%となり、瀬の海漁場においては、特に、釣りによる集中利用が顕著であった。

また、1隻当たり出漁日数は、対象海域全体で年間226日、月平均18.8日となる。このうち、瀬の海漁場へは年間84日、月平均7.0日出漁していることになる。

(2) 利用の季節変化

前項で記したとおり、瀬の海漁場では全出漁日数の94%が釣りで占められている。

したがって、釣りによる月別利用状況をみることによって、当漁場の利用の季節変化をみる事ができる。釣

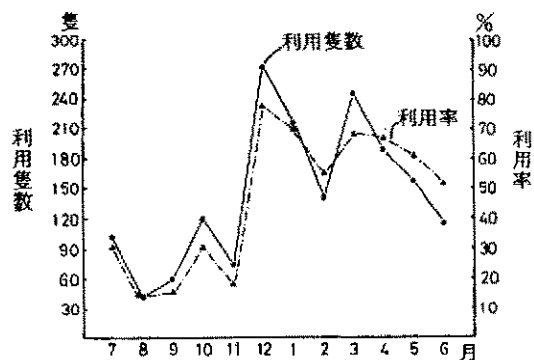


図2 瀬の海漁場の月別利用隻数, 利用率(釣り)

りによる月別利用日数及び利用率を図2に示す。

利用日数, 利用率とも類似した変化を示しており, 7月~11月が低く, 12月~6月が高い。特に, 12月の利用率は80%近くで, 瀬の海漁場に極端に集中した利用が認められた。

2 操業人数(利用客数)

(1) 漁法別操業人数

標本船22隻による1年間の漁法別操業人数を対象海域全体と瀬の海漁場分に分けて表3に示す。

調査海域全体における標本船の年間操業人数は44,635人で、漁法別内訳は、釣り40,854人(91.5%),いかつり2,954人(6.6%),延縄674人(1.5%),刺網53人(0.3%)であった。このうち、瀬の海漁場での操業人数は21,120人で、漁法別内訳は、釣り20,977人(99.3%),いかつり69人(0.3%),延縄44人(0.2%),刺網30人(0.1%)であった。

したがって、瀬の海漁場における操業人数の構成比は、全漁法で47.3%、漁法別では、釣り51.3%、いかつり2.3%、延縄6.5%、刺網19.6%である。全漁法及び釣りの構成比は、利用率を上回っている。

(2) 単位当たり操業人数

1隻1日当たり操業人数は、対象海域全体で9.0人、

表2 標本船22隻による漁法別出漁日数

	計	釣り	いかつり	延縄	刺網
全海域(日)	4,980	3,871	481	500	128
うち瀬の海漁場分(日)	1,847	1,743	18	70	16
利用率(%)	37.1	45.0	3.7	14.0	12.5

表3 標本船22隻による漁法別操業人数

	計	釣り	いかつり	延縄	刺網
全海域(人)	44,635	40,854	2,954	674	153
うす瀬の海漁場分(人)	21,120	20,977	69	44	30
利用率(%)	47.3	51.3	2.3	6.5	19.6

瀬の海漁場では11.4人である。また、釣りによる1隻1日当たり操業人数は、対象海域全体で10.6人、瀬の海漁場では12.0人で、いずれも瀬の海漁場の操業人数が全体の平均を上回っている。

(3) 季節変化

瀬の海漁場における釣りの月別操業人数及び1隻1日当たり操業人数を図3に示す。

月別操業人数の変化は、図2の月別出漁日数の変化と同様の变化を示しており、7～11月に少なく、12～5月に多い。

1隻1日当たり操業人数は、7～9月の夏季が7～8人と低く、4～5月の春季には14～15人と夏季の2倍の高さである。10～3月及び6月は平均の12人前後である。

3 餌の使用状況

(1) 漁法別使用量

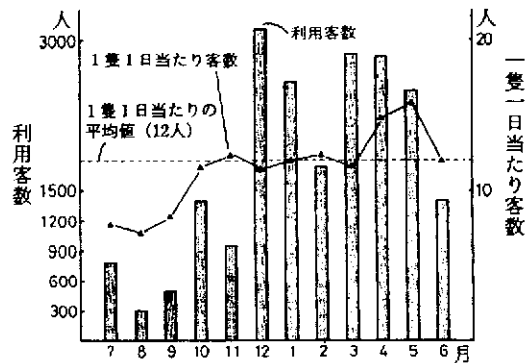


図3 瀬の海漁場の月別利用客数、1隻1日当たり利用客数(釣り)

標本船22隻による1年間の漁法別餌使用量を対象海域全体と瀬の海漁場分に分けて表4に示す。

対象海域全体における標本船の年間餌使用量は185トンで、このうち、釣りが179トン、97%を占め、残りは延縄等によるものである。いかつり及び刺網でも多少の餌が使用されているが、これは出漁時に釣りを兼業したためである。

瀬の海漁場では年間86トン、対象海域全体の46%が使用されている。このうち85トン、99%が釣りによるものである。瀬の海漁場における餌使用量の構成比は、全漁法で46.5%、漁法別では、釣り47.8%、延縄9.1%で、全漁法及び釣りの構成比は利用率を上回っている。

(2) 単位当たり使用量

1日1人当たりの餌使用量は、対象海域全体で4.1kg、瀬の海漁場でも4.1kgと差がない。また、釣りによる1日1人当たりの餌使用量は、対象海域全体で4.4kg、瀬の海漁場では4.1kgで若干少ない。

4 漁獲状況

標本船22隻による1年間の漁法別主要魚種別漁獲尾数を対象海域全体と瀬の海漁場分に分けて表5に示す。

ただし、主要魚種は全体で1万尾以上漁獲された上位10種についてとりまとめたため、瀬の海漁場分については上位10種とはなっていない。

(1) 漁法別漁獲尾数

対象海域全体で約140万尾の漁獲があり、これを漁法別にみると、釣り130万尾(92.9%)、いかつり6.9万尾(4.9%)、延縄1.4万尾(1.0%)、刺網1.6万尾(1.1%)であった。

瀬の海漁場では71.7万尾の漁獲があり、これを漁法別

表4 標本船22隻による漁法別餌使用量

	計	釣り	いかつり	延縄	刺網
全海域(kg)	184,758	178,841	80	5,826	11
うす瀬の海漁場分(kg)	85,953	85,424	0	528	1
利用率(%)	46.5	47.8	0	9.1	9.1

表5 標本船22隻による漁法別魚種別漁獲量及び瀬の海漁場における漁法別魚種別漁獲量

(平成2年7月～同3年6月 単位:尾)

	全海					瀬の海漁場分(2メッシュ分)				
	総計	釣り	いかつり	延縄	刺網	合計	釣り	いかつり	延縄	刺網
アジ	1,046,900	1,027,430	19,355	7	104	636,072	623,737	12,278	7	50
サバ	86,712	74,576	11,971	15	151	55,705	45,824	9,769	0	112
ブリ類	59,701	58,639	1,047	7	8	22	22	0	0	0
ソーダ	38,236	36,480	1,756	0	0	1,187	1,187	0	0	0
カツオ	27,478	27,189	288	0	0	10	10	0	0	0
スルメイカ	20,583	4,340	16,237	5	0	1,006	698	303	5	0
オオメハタ	17,904	4,701	35	7,110	6,058	3,528	2,362	0	727	439
ヤリイカ	17,406	418	16,986	2	0	449	73	374	2	0
ムロアジ	16,255	16,255	0	0	0	13,815	13,815	0	0	0
キス	15,424	15,277	54	41	53	0	0	0	0	0
その他	55,951	38,665	1,021	6,381	9,887	5,693	3,450	291	984	968
計	1,402,550	1,303,970	68,750	13,568	16,261	717,487	691,178	23,015	1,725	1,569
					利用率(%)	51.2	53.0	33.5	12.7	9.6

にみると、釣り69.1万尾(96,4%)、いかつり2.3万尾(3.2%)、延縄0.2万尾(0.3%)、刺網0.2万尾(0.3%)であった。

瀬の海漁場の漁獲が全体に占める割合、すなわち、瀬の海漁場の漁獲量構成比は、全漁法で51.2%、釣りで53.0%、いかつりで33.5%、延縄で12.7%、刺網で9.6%で、全漁法、釣り及びいかつりの構成比は、利用率を上回っている。

(2) 単位当たり漁獲尾数

1日1人当たり漁獲尾数は対象海域全体で31.4尾、瀬の海漁場では34.0尾である。釣りによる1日1人当たり漁獲尾数は対象海域全体で31.9尾、瀬の海漁場では32.9尾で、いずれも、瀬の海漁場の方がやや高い。

(3) 魚種組成

総漁獲尾数140万尾の魚種別構成比は、アジ74.6%、サバ6.2%、ブリ類4.3%、ソーダ2.7%、カツオ2.0%、スルメイカ1.5%、オオメハタ1.3%、ヤリイカ1.2%、ムロアジ1.2%、キス1.1%の順でアジの比率が高い。

瀬の海漁場の漁獲尾数71.7万尾の魚種別構成比は、アジ88.7%、サバ7.8%、ムロアジ1.9%、オオメハタ0.5%、ソーダ0.2%、スルメイカ0.1%、の順で、アジの比率が極めて高い。

(4) 主要魚種の経月変化

瀬の海漁場の釣りによる主要魚種上位7種の月別漁獲状況を図4に示す。

アジ、サバ及びムツはほぼ周年漁獲されており、ソーダは9～11月、ムロアジは12～6月、スルメイカは3～4月、オオメハタは5～6月に漁獲された。アジは12月に、サバは10月に漁獲が集中した。

以上、出漁日数、操業人数、餌使用量及び漁獲尾数による利用実態を視覚的に表現するため、主要漁法である釣り(遊漁)の場合で示すと図5-1～5のとおりとなる。

考 察

1 瀬の海漁場の利用率

神奈川県(1990)によれば、「遊漁船業の適正化に関する法律」(平成元年10月1日施行)に基づく届出結果から、瀬の海漁場を利用しているのは横須賀市長井から小田原市江之浦地区(大楠、小坪、鎌倉、藤沢地区は利用していない)の291経営体のうち106経営体で、経営体による利用率は36.6%である。

また、神奈川県(1990、前出)によれば、スポーツ新聞の釣り情報をもとにした遊漁船の瀬の海漁場利用率は36.7%である。

今回実施した標本船調査による瀬の海漁場の出漁日数からみた利用率は、全漁法で37.1%、漁法別にみると、

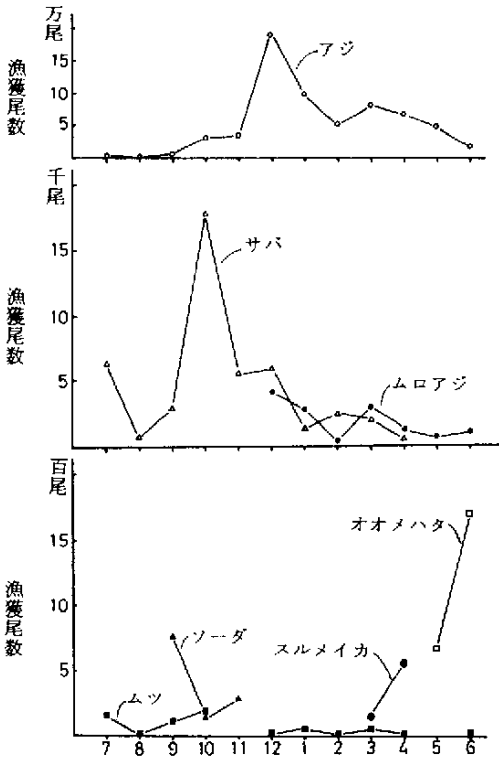


図4 瀬の海漁場における主要魚種の月別漁獲尾数 (釣り)

釣り45.0%，いかつり3.7%，延縄14.0%，刺網12.5%であった。釣り及びいかつりは遊漁船によるもので、遊漁船の利用率は40.5%となる。

今回の標本船の抽出は“瀬の海漁場を利用する船”という条件付きであったため、利用率の推定値が実際より過大となった可能性がある。過去の調査結果による利用率、36.6%、36.7%と比較すると約4ポイント上回っている。したがって、過去の調査結果を重視すれば、瀬の

海漁場の利用率は37%位が妥当と考えられる。

なお、神奈川県水産試験場（1970）によれば、遊漁船の利用が活発になる昭和40年代半ば以前の大磯町漁協所属漁船による瀬の海漁場の延利用日数は表6のとおりで、年平均で、動力船は753日、無動力船は1,193日出漁しており、利用率は動力船が20.6%、無動力船が24.7%である。調査方法が異なるため、正確な対比はできないが、この時代と比較すると、近年の遊漁船による利用率37%は約12ポイント高く、瀬の海漁場への集中度がかなり増大したといえよう。

2 出漁（稼働）状況

関東農政局神奈川統計情報事務所（1990）によれば、県下の1,748経営体（20トン未満船）の78%は年間200日未満の出漁状況である。また、神奈川県水産課（1990）によれば、相模湾東部地域（葉山町～二宮町）の遊漁船の月平均稼働日数は15.0日である。

したがって、今回調査した標本船の年間出漁日数226日及び月平均出漁日数18.8日はかなり高い水準にあるといえよう。

3 遊漁船の客数

神奈川県水産課（1990，前出）によれば、相模湾東部地域（葉山町～二宮町）の1隻1日当たり平均客数は8.5人である。

今回の調査結果（葉山町～小田原市）では、対象海域全体で10.6人、瀬の海漁場では12.0人で、相模湾東部地域とは較差が認められる。特に、瀬の海漁場の利用客が多いことは釣り客の当漁場に対するニーズの強さを反映したものとといえよう。

4 漁獲状況

神奈川県水産課（1990，前出）によれば、1989年4月～1990年3月の相模湾東部地域での遊漁による漁獲の魚種組成は、サバ25.8%、アジ21.6%、ブリ類11.4%、ソーダ9.8%、スルメ7.7%、シイラ5.0%である。

今回の調査結果ではアジの漁獲構成比が対象海域全体

表6 大磯町漁協所属船の年別延出漁状況

	昭和 33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43 年	平均	利用率
動力船（瀬の海漁場）	697	376	731	746	991	806	1,195	693	929	508	609	753 隻	20.6%
（その他漁場）	3,730	4,267	3,293	2,935	2,818	2,922	2,183	1,946	3,017	2,377	2,462	2,905 隻	
無動力船（瀬の海漁場）	507	470	1,082	1,501	1,442	1,282	1,708	1,387	1,396	1,160	1,186	1,193 隻	24.7%
（その他漁場）	6,446	6,625	5,851	3,110	3,071	3,488	3,232	1,900	2,777	1,740	1,693	3,630 隻	

で74.6%、瀬の海漁場では88.7%と極めて高かった。これは、1990年7月～1991年6月にかけて、アジの湾内回遊量が大きく、アジ対象の遊漁期間が例年以上に長かったためである。

5 瀬の海漁場の利用実態の把握

今回の調査では、標本船抽出が“遊漁主体で瀬の海を利用する船”という条件付きであったため、漁業の実態については十分な把握ができなかった、瀬の海漁場の利用率の評価に偏りがあった、という2つの問題点を含んでいる。

しかし、については、近年、瀬の海漁場においては、漁業による利用は極めて少なく、もっぱら遊漁船が利用している状況にあることから判断して、遊漁船の実態が把握されればこれをほぼ全体像と考えてよいと思われる。

については、考察の1で記したように、遊漁船による瀬の海漁場の利用率は37%位が妥当と考えられる。

そこで、既往の資料及び今回の調査結果をもとに、瀬の海漁場における遊漁船の利用実態の推計を試みた。

(1) 経営体をもとにした引き伸し

本県の遊漁船業の経営体のうち大磯・二宮地先漁場を利用するのは長井～江之浦地区の106経営体である。ただし、大磯・二宮地先漁場＝瀬の海漁場ではなく、瀬の海漁場は大磯・二宮地先漁場の一部である。

今回の標本船調査の結果から、釣りによる大磯・二宮地先漁場（図1の大磯～二宮地先の17漁区分、点線で囲まれた海域部分）への出漁日数は2,628日、このうち瀬の海漁場へは1,743日（66%）の出漁である。この割合を用いて計算すると、 $106 \times 0.66 \div 20 = 3.5$ 、すなわち、106経営体の66%が瀬の海漁場を利用しており、これは今回の標本経営体の3.5倍にあたる。

(2) 客数をもとにした引き伸し

関東農政局神奈川統計情報事務所（1989）によれば、第8次漁業センサス（昭和63年11月1日）結果から、葉山町～小田原市の遊漁船が過去1年間に扱った客数は451,100人である。標本船22隻の釣りによる年間客数40,854人、瀬の海漁場の利用率37%、をもとに計算すると、 $451,100 \div 40,854 \times 0.37 = 4.1$ で、標本船22隻の4.1倍となる。

(3) 稼働日数をもとにした引き伸し

神奈川県水産課（1990、前出）及び神奈川県（1991）によれば、相模湾東部地域の遊漁船307隻の年間出漁日数は55,260日と推定される。

標本船22隻の釣りによる年間出漁日数3,871日、瀬の海漁場の利用率37%、をもとに計算すると、55,260日÷

$3,871 \text{日} \times 0.37 = 5.3$ で、標本船22隻の5.3倍となる。

以上の3とおりの試算結果から、瀬の海漁場の利用実態は、標本船22隻の3.5～5.3倍となり、試算方法によって差が認められるが、これらの平均値4.3倍をおおよそ4倍として推計すると、瀬の海漁場における遊漁の年間操業実態及び漁獲実態は表7のとおりとなる。

すなわち、利用隻（日）数は年間約7,000隻（日）、客数は約84,000人、餌使用量は約340トン、漁獲量は約276万尾である。

年間利用日数7,000日は、考察の1で記した漁船による利用時代（昭和33～43年）の平均1,946日の3.6倍にあたり、この11年間で最も利用された昭和39年の2,903日の2.4倍である。

また、操業人数（客数）については、漁船時代と遊漁船時代では比較にならないほど較差がある。すなわち、漁船時代は1隻当たり操業人数が1～2人であったから多めにみても昭和39年の場合で2人×3,000日＝6,000人程度であったのに対し、遊漁船時代（今回の調査）では84,000人であるから、14倍の開きがある。

このように、利用日数及び操業人数（客数）とも、漁船時代に比べ近年は大幅に増大しており、当然これは漁獲面にも現れている。

表7から漁獲尾数を魚種別にみると、アジが249万尾（90%）、サバが18万尾（7%）である。これらの重量は、1991年10～12月間に実施した釣獲調査（水試相模湾支所）で得たマアジとサバの平均体重78g、300gをもとに換算すると、アジ194トン、サバ55トンとなる。因みに、1991年に大磯定置で漁獲されたアジは121トン、サバは3トンで、また、二宮定置で漁獲されたアジは50ト

表7 瀬の海漁場の利用実態推計結果

	標本船22隻 の調査結果	全体の推計値 (4倍)
出漁隻数(隻)	1,743	6,972
客数(人)	20,977	83,908
餌使用量(kg)	85,424	341,696
アジ	623,737	2,494,948
サバ	45,824	183,296
ムツ	13,815	55,260
オオミドリ	2,362	9,448
ソウダ	1,187	4,748
量	698	2,792
尾)	668	2,672
その他	2,887	11,548
合計	691,178	2,764,712

表 8 瀬の海漁場の利用状況の推移

	利用率	出漁日数	操業人数	漁獲量
昭和33～43年（平均値）	23%	1,946日	3,892人	158 トン
平成 2～3 年（推計値）	37%	7,000日	84,000人	アジ1941 トン サバ 55 トン
推移	14ポイント増	3.6倍	22倍	91 トン増

ン、サバは3トンである。したがって、遊漁による瀬の海漁場のアジ、サバの漁獲量は、これら定置の漁獲量を上回る数量であったと推察される。

また、神奈川県（1990，前出）によれば、大磯町漁協の昭和48～63年における定置、地曳網漁業を除く水揚げは100トン前後から近年は50トン前後で推移しており、瀬の海漁場における遊漁のアジ、サバ漁獲量はこれをも大幅に上回っていると推察される。

今回の調査結果から得られた瀬の海漁場の利用状況（推計値）を、昭和33～43年の漁業時代と対比すると表8のとおりとなる。昭和33～43年の利用率、出漁日数は表6のデータを用い、操業人数は2人×出漁日数とした。漁獲量は、神奈川県（1990，前出）による大磯町漁協の昭和33～43年の定置、地曳網漁業を除く水揚げ量を用いた。

利用率では14ポイントの上昇が認められ、出漁日数、操業人数及び漁獲量の絶対量で比較すると、出漁日数で3.6倍、操業人数で22倍、漁獲量で91トンの増大が認められる。

すなわち、現在の瀬の海漁場の利用は、昭和33～43年の漁業時代と比べ、投下労働量の面で飛躍的に増大していることがわかる。

要 約

1 「遊漁船業の適正化に関する法律」に基づく届出結果から得られた瀬の海漁場の利用率は36.6%、水試相模湾支所で実施中の遊漁調査から得られた瀬の海漁場の利用率は36.7%、今回実施した標本船調査による瀬の海漁場の利用率は、全漁法で37.1%、釣り及びいかづり（遊漁）で40.5%であった。

なお、遊漁船利用が活発になる以前の漁船による瀬の海漁場の利用状況は、動力船で20.6%、無動力船で24.7%の利用率であった。

2 標本船調査結果から、瀬の海漁場の利用率又は構成比を主たる漁法である釣り（遊漁）で見ると、隻数で

45.0%、客数で51.3%、餌使用量で47.8%、漁獲尾数で53.0%となり、当漁場への一局集中が認められる。

3 標本船調査の結果をもとに、瀬の海漁場の利用実態を推計したところ、利用隻（日）数は年間約7,000隻（日）、客数は約84,000人、餌使用量は約340トン、漁獲量は約276万尾であった。

4 漁獲量を魚種別にみると、アジが249万尾、サバが18万尾で、これを重量換算すると、アジ194トン、サバ55トンと推定された。この値は、1991年に大磯定置で漁獲されたアジ121トン、サバ3トン及び二宮定置で漁獲されたアジ50トン、サバ3トンを上回る数量であった。

5 瀬の海漁場の利用状況について、昭和33～43年の漁業時代と現在の遊漁船時代とを比較すると、利用率では14ポイントの上昇が認められ、出漁日数、操業人数及び漁獲量の絶対量で比較すると、出漁日数で3.6倍、操業人数で22倍、漁獲量で91トンの増大が認められ、特に投下労働量の面で飛躍的な伸びを示している。

引用文献

神奈川県（1990）：平成元年度沿岸漁場総合整備開発基礎調査報告書（相模湾瀬の海漁場調査）

神奈川県水産試験場（1970）：大型魚礁効果認定特別調査，神水試資料No.143

関東農政局神奈川県統計情報事務所（1990）：神奈川県農林水産統計年報（水産業編），出漁日数別経営体数

神奈川県水産課（1990）：遊漁船による釣獲量等実態調査

関東農政局神奈川県統計情報事務所（1989）：神奈川県農林水産統計年報（水産業編），第8次漁業センサス漁業地区調査結果

神奈川県（1991）：平成2年度沿岸漁場総合整備開発基礎調査報告書（昭和63～平成2年度総合とりまとめ報告書）

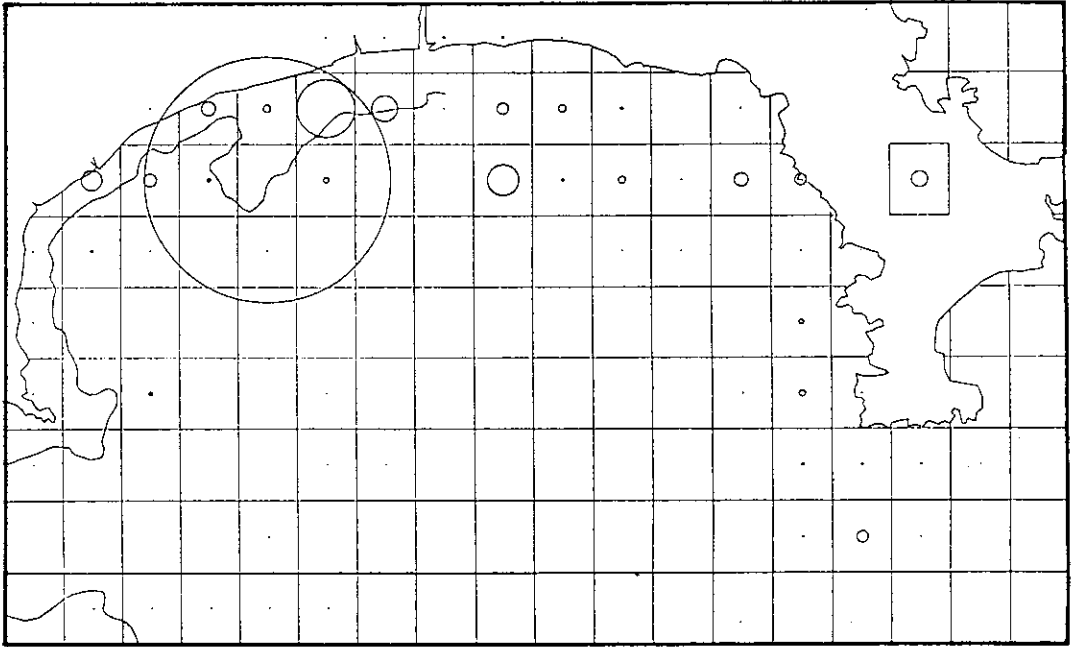


図 5 - 1 漁区別出漁日数 (釣り)

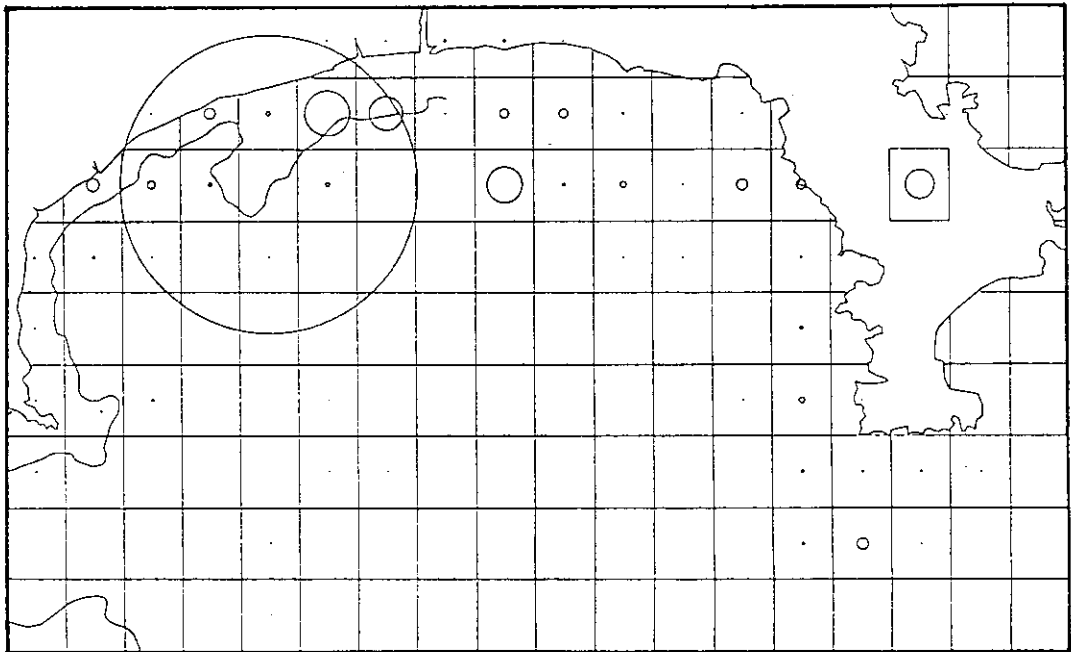


図 5 - 2 漁区別操業人数 (釣り)

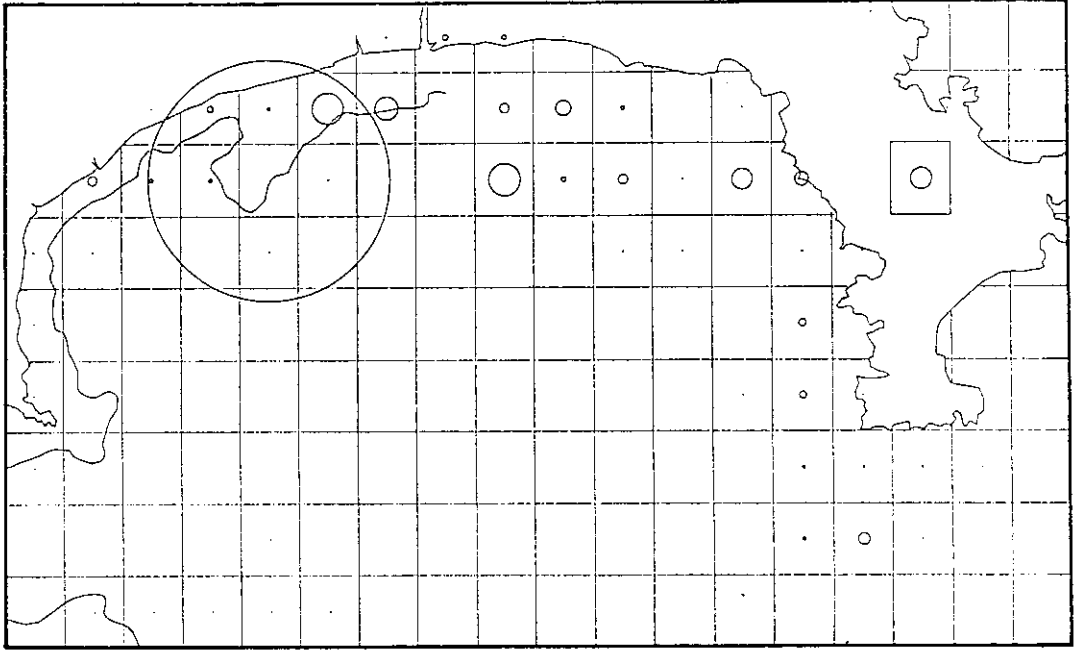


図 5 - 3 漁区別餌使用量 (釣り)

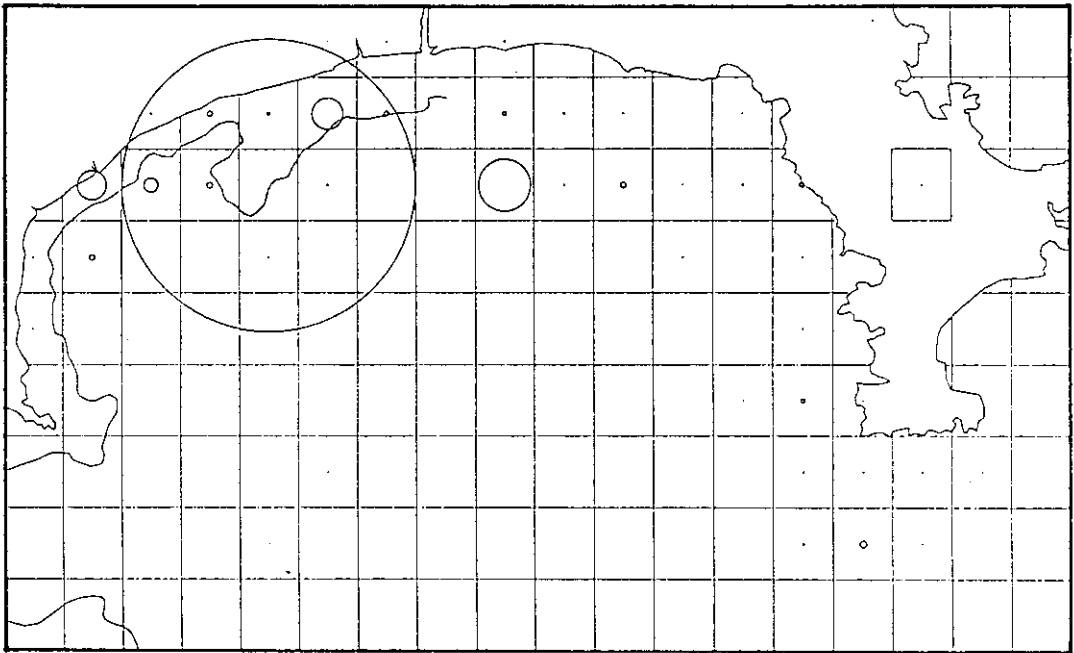


図 5 - 4 漁区別アジの漁獲尾数 (釣り)

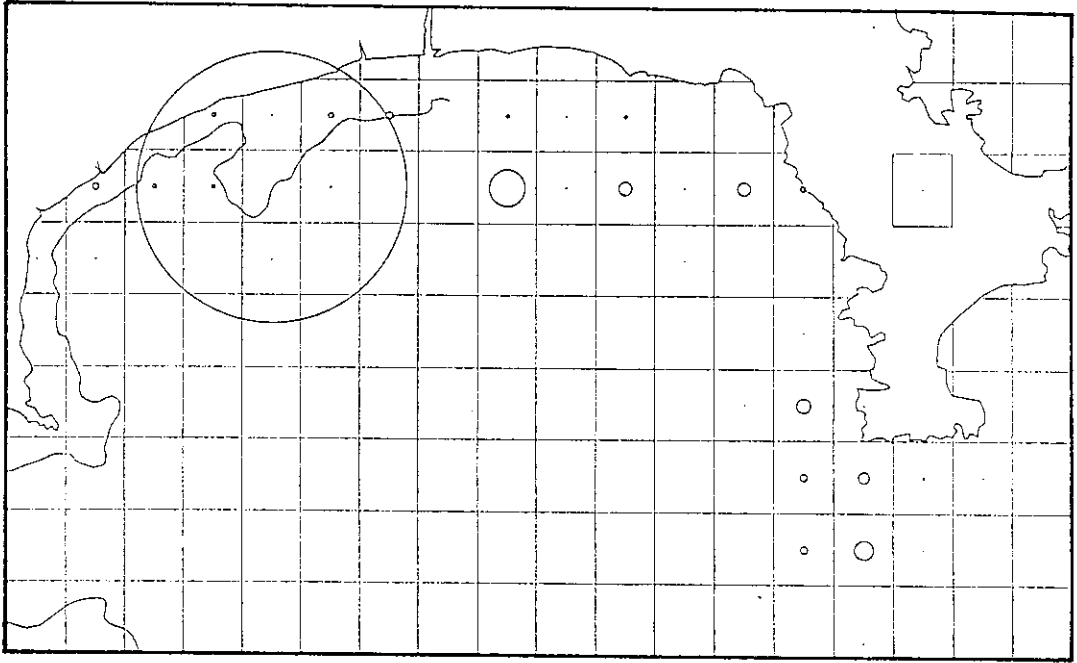


図 5 - 5 漁区別サバの漁獲尾数 (釣り)